知的障害児の増加と出生時体重ならびに母年齢との関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2015-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 悦司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2838

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2014 年 第 3 巻 第 1 号　27 頁

P-04　知的障害児の増加と出生時体重ならびに母年齢との関連

○岡本　悦司

国立保健医療科学院

［目的］知的障害児の増加の原因として出生時体重と母年齢との関連を経年推移から明らかにするとともに知的障害児の増加を説明する数理モデルを構築する。［方法］福祉統計(療育手帳の新規交付件数,特別児童扶養手当の新規認定数)ならびに学校統計(学校基本調査)を経年的に分析して知的障害児の増加状況を明らかにする。また出生時体重ならびに母の平均年齢との経年的な関連を明らかにする数理モデルを構築し,今後高齢出産がさらに進んだ場合の知的障害児の発生率を予測する。［結果］1973～2012 年の 40 年間で,知的障害児の出生千当たり発生率は重度では増加していなかったが中軽度障害で増加がみられ,1993 年頃を境に最近の 20 年間の増加が著しかった。40 年間の出生時体重と母年齢との関連をみると,母年齢が 29 歳を越えると出生時体重が急減するという逆ロジスティックカーブが観察され, 1993 年を境に知的障害児の発生率が急増した原因として,母年齢の上昇と出生時体重の減少による相乗効果が示唆された。母年齢と出生時体重の 2 要因と特別児童扶養手当の中程度知識障害の新規認定率との関連を数理モデルで検討したところ,きわめて高い適合(R2:0.995)が得られた。［結論］1973～2012 年の 40 年間で,母の平均年齢は 4.2 歳上昇し,出生時体重は 200g 減少した。その間,知的障害児の発生率は,中軽度を中心に確実に増加した。各年の中程度知的障害の発生率は, 数理モデルを適用することにより母の平均年齢と出生時体重の 2 要因だけで, ほぼ完全に説明される。近年では出生時体重の減少はとまっているが,母年齢の高齢化はなおも進行しており,知的障害児の割合は今後も増加すると予想される。